原発いらん

■札幌「さようならの原発北海道集会」に千五百人

（レイバーネットから）

六月二日、東京での「つながろうフクシマ！さようなら原発集会」「反原発国会大包囲」にあわせ、札幌でも「さようなら原発北海道集会」（主催：さようなら原発１０００万人アクション北海道」実行委員会）が開かれ、千五百人（主催者発表）が脱原発への意思を示しました。

呼びかけ人の一人、西尾正道さん（北海道がんセンター名誉院長・写真下）は、内部被曝の危険性とともに、「ＩＣＲＰ（国際放射線防護委員会）や御用学者たちが宣伝している《安全論》は科学ではなく、こうあってほしいという《物語》の創造に過ぎない」と、国際原子力ムラ・御用学者を痛烈に批判しました。

大間原発（青森県）建設予定地で一万ヘクタールの用地の買収を拒否して闘っている小笠原厚子さんは、「お金がなくても、海の恵みがあれば生きていける。大切なのは自然とともに生きること」と自分の闘いを振り返りながら自然との共生を訴えました。

久世薫嗣さん（核廃棄物施設誘致に反対する連絡協議会）は、「北海道では、北部の幌延町に、高レベル放射性廃棄物の地層処分のための研究施設（地下坑を掘って研究をしているが廃棄物は入れていない）があり、最近もガス噴出など『あわや爆発寸前』の事故を起こしています。施設は日本原子力研究機構が運営しており、その原子力機構は、事故に次ぐ事故、トラブルに次ぐトラブルで、こんな連中に核を取り扱う資格などありません。」と原子力機構の安全意識のなさ、事故の危険性、そして幌延を核の最終処分場にしないための運動の強化を訴えました。（傍線は編集委員）

組織を強化拡大し、階級的労働運動の発展をめざそう！

■５・３１　東京大集会、東京地検激励、東京電力要請行動（福島原発告訴団ＨＰから抜粋）

二〇一三年五月三十一日（金）午後一時三〇分から、福島原発告訴団は、福島原発事故の厳正な捜査と起訴を求めるために、日比谷野外音楽堂において、「福島の叫びを聞いてください！」をテーマに大集会を行いました。

全国各地から千人を超える参加者が集まり、福島県内各地からの参加者七名がそれぞれの立場からの現状を叫びました。「被曝労働者の過酷な実態」、「復興策一色の政策への疑問」、「子どもの靴底に鉛を張ったり」、「外で遊べない子どもたちの様子」、「測定により、明らかになる被曝の実態」など、今も厳しい困難の中に生きる被害者としての思いを口々に語りました。

続いて、広瀬隆さんをはじめ、全国のメンバーから、各地の被害実態や福島への連帯の言葉がありました。

そして、東京地検激励行動へ。

東京地検前では、海渡雄一弁護士から、「この告訴の持つ意味」が語られ、佐藤和良副団長からの現状報告や福島からの参加者の「ぜひ、きちんと捜査をしてほしい！」という訴えがありました。

弁護士と代表が地検に入り、要請書と追加の署名を提出（総署名数は、十万八七六三筆）。

続いて、東電に対する要請行動を行いました。手渡された要請書に対し、東電原子力センター所長は、「確かに受け取りました。所内に伝えます。後日回答します」とコメントしました。弁護団の保田弁護士は「東電が自ら、証拠資料を提出し、真実を明らかにせよ」と要請をしました。

最後に武藤類子団長が、参加者に対して長時間にわたる行動への感謝を述べ、「みなさんが私たちの力です。今後もつながっていきましょう」と話しました。

アート・アド分会　Ｎ